

高山の文化を高めた人々(14)

渋草の名声を高めた

三輪源次郎

清水ひろ子

三輪源次郎維一は天保七年七月、高山町江馬文弼維寿の長子として生まれましたが、三才で孤児となり、伯父天木屋源次郎維貞の養子となりました。

本業は酒造と蚕種製造でしたが、慶応二年八月漆山取切鉾を發見し鉾山を始め、明治三年六月鹿間谷蛇腹平鉾山にも着手。

明治三年大野屋武田栄三郎と謀り飛騨国産物会社を開設し取締役となり、明治四年銀絞吹所を鋳製所と改称して、産物会社と同じ会社事業としました。

又、明治六年生井修斎と共に一之町に明成義塾という塾を設けて、志ある人は誰でも学べるようにし、元新宮藩士中川八郎を招いて明成義塾で毎日英語の授業も行いました。

明成義塾は明治八年から煥章学校となりました。その時金壹百円の寄附をして筑摩県より銀壹一個を賜ったとあります。

明治十年に蛇腹平鉾山を、明治十九年には漆山鉾山を三井鉾山へ譲り、同十九年郡上坂本鉾山と益田馬瀬の鉾山にも着手しましたが、余り長くは続かなかったようです。私の祖父（松山吉一）から聞いた話では、三輪のどんな様（三輪源次郎のこと）は船津の鉾山へ行く時は一歩歩くごとに一両の収入の割になると言っていていかれたと

言っていました。国府から十三墓峠を越え荒原からさらに山越えをして船津へ通われたそうです。

渋草焼はご存知のように天保十二年、時の郡代豊田藤之進によつて窯が始まり、尾張から戸田柳造等三人のろくろ師と、九谷から曾我竹山等三人の画工を呼びよせ、尾張熱田白鳥湊の材木商中村屋七兵衛にその費用を引請させ、半官半民の、今で言う第三セクター方式で始まりました。郡代の庇護の下で成立つていったようです。

この時代は飛騨九谷、飛騨赤絵、高山焼、岡本焼と印や銘、箱書があり、又画工の銘の入ったものもあります。

明治十四年三輪源次郎は色絵より染付に力を入れることにし、松山惣兵衛、川上栄吉を九州有田に派遣して技術修得させ、二名とも帰高ののち丸窯を作り大物も焼けるようになりました。

この頃より色絵染付の他、飛騨各地の土や石を使い青磁、鉄砂等の色薬の磁器も作り出し、全国の博覧会、博物館にも出品する様になり、褒状をもらう程良品が作り出された。

明治二十六年松山惣兵衛、川上栄吉、川上友之助の三人が助手を連れて退社し、すぐ横に新窯を作つて渋草新山の銘を入れ

ました。（柳造窯の始まり）三輪源次郎は激怒し、松山惣兵衛との境に垣根を巡らし、その一位の垣根は最近までありました。

明治三十年になつて三輪源次郎はそれまで鉾山、酒造、蚕種製造の利潤を芳国社につぎ込み、苦しい経営をしていた芳国社を飛騨で最初の株式会社として発足させました。

明治三十三年（一九〇〇年）にはパリ万国博に出品、銅賞を得ました。この時のフランスからの手紙が芳国社にあります。日本国岐阜県芳国社宛で来ています。

三輪源次郎は一之町の今の西齒科の所に店を構えていました。が、家財が傾くにつれ、工場の中の事務所の二階で寝起きするようになり、祖父の小さい頃はよく菓子をもらいに二階に上がつて行つたと言っていました。

明治四十四年一月二日に三輪源次郎は七十五才で没しました。私財ごとく注ぎ込み、残つたものは借金だけと言う大波乱の生涯でした。清水商事の先代の三輪さんも三輪源次郎の分家ですが、三輪さんのお話では、三輪源次郎が亡くなった時は一之町の家でその遺髪は土蔵に塗り込めたと言われました。次の年、一之町の家は飛騨産業銀行の建物として使われ、そのずつとあとになつて法務局になり、西齒科になりました。遺髪を塗り込めた土蔵は飛騨産業銀行の時に取り毀されたようです。芳国社は次の社長に直井三造をたて事業を続け、店は現在の上二之町に移り今に至っています。

三輪源次郎亡きあととも一九一〇年の日英博覧会銅賞、一九一四年のパナマ運河開通記念万国博銅賞と栄誉は続き、三輪源次郎が目指したように日本有数の窯となつて行きます。

三輪源次郎は絵を村瀬雪峽に学んで慶山と号し、のちに墨涯とも墨外とも称しました。又宗和流茶道清風社の概史の中にも明治十三年から森本古泉や小野華処と共に掲げられています。上木甚四郎が書いた事蹟の中で「幼ニシテ壯図ヲ抱キ自己ノ信スル事業ニ到テハ倒レテ歇ムノ決心ヲ以テ猛進セリ」と有り、渋草をここまで築き上げた功勞者としてあげられています。

（芳国舎・故松山文雄氏長女
参考文献／高山市史・飛騨のやきもの